

こつと笑いながら通り過ぎていく。

ここは、東京・品川・大井五丁目、滝王子児童セ

ンター。

夏休みが、のどかに過ぎていく。蟬はまだないて

いる。

(滝王子児童センター)

## 日常の遊びの中で突然気づいた体験

ーU夫がつくったテントからー

清原 規子

この四月にU夫は一年保育で私たちの園に転入してきた。U夫のご家族とも話をして、おとなの援助が少し必要だろうということでは私が彼の担当となっ

た。

園生活が始まった。他の子どもたちが興味をもつてU夫に関わってくると、無理することなく、自然

と一緒にいる姿が見られ、私自身もゆったりと関わることができた。

### 砂場のおもちゃで遊ぶ

毎日U夫と一緒に過ごしていく中で、どうやら砂場のおもちゃの赤や青の車、青や緑の新幹線等が好きなようだと思いがついた。また、その車たちは彼にとっては「機関車トーマス」の仲間たちであった。

私が砂場に行くと、新幹線、車、ブルドーザー等を半分砂に埋めながら動かして遊んでいる。  
(四月十七日)

U夫、砂場の半分近くを使って、大きく線路(道路?)を作り、新幹線二台位と車を砂の中に頭を少しだけ出して埋めている。Y先生がU夫の新幹線を見ながら「お名前は?」と聞くと、一台の砂に埋めていないものの上げながら「エドワード」という。(五月十一日)

U夫の母親に聞くと、昔から「機関車トーマス」



が大好きとのこと。この遊びがU夫の幼稚園での毎日の遊びの中心となっていく。そしてその中で、少しずつ変化が見られていった。

今日はなぜか砂場の枠の外の所で、新幹線や、木の車両(貨車)を見つけてきてそこに砂を積んだりして遊んでいる。(五月二十日)  
昼食後(注:昼食は私とは別行動である)行ってみると、バス乗り場へと続く屋根のある通路で、今度は三つ貨車をつなげ、上から砂を入れている。  
(六月三日)

トーマス遊びをする時は、砂場でしていた日々が

ほとんどだったのが、砂場の枠から出て、記録にはないが、ある日、砂場から園庭に車を使って線路（道路？）を長く描き、そしてそのうち、全く別の場所ですーマス遊びが始まる。

七月に入ってから、おもちゃでのトーマス遊びは少し減り、外の水場に水を貯めたり、ホースで勢いよく水をとぼしたりする遊びや、青い三輪車を乗り回したりすることが増えてきた。しかし私には、活動的な水遊びや三輪車遊びの合間の、静かに、車を砂に埋めたり、貨車に石炭のように砂を積んだりする活動がU夫にとっては非常に大切に思えた。そしてこの頃、U夫にとってトーマス遊びは何だろうとその姿を見る度、思いをめぐらすようになった。

### 遊戯室のブロックで、自分で作って遊ぶ

夏休みも終わり、久し振りに幼稚園に来たU夫は、何日か後から園舎二階の遊戯室で遊ぶようになった。

大型ブロックを出してきて、車のついたブロックに二つの凹型のブロックをつける。もう一つ車のついたブロックをもってきて「つなげよう」という。私「ん？ つながる？」というところと四つの凹型のブロックを持ってきて

しっかりと二つを連結させる。（九月四日）  
二階へ。汽車（U夫が作った赤いものと青いもの）の踏切を作り出す。（九月十六日）

二階に行ってブロック遊び。私は、その場に、ただ、いる。というのが重要なようで、動くところ「あ、すわって」「ここ」等言ってくる。赤と青の車をそれぞれ作る。繋げたりも。結構左右対称に作る。赤と青の車を走らせたり、前面の部分を見て指をさしながら「顔、鼻、口、眉毛、煙突」等言ってくる。

（九月二十八日）

特に、運動会が終わった後は、私自身も開放的だったように思うが、U夫も気のせいかゆったりし

ているように思われた。

また、この赤と青の車はかなり大事なようで次のような場面も見られた。

いつものように赤の滑車、青の滑車をそれぞれに繋げて作り始める。年中のK夫、Y夫に赤の滑車をとられて「ちようだい」と一生懸命。「ほら、これあるよ」と他の色のものを持ってきてそれと交換してほしいと持っている。私が代弁をして「他の色と交換してつて」と伝えるとしばらくしてK夫、「じゃあいいよ」と替えてくれる。(九月三十日)

一学期に続き、この赤い車と青い車はU夫にとつての「機関車トーマス」だと思ひ、ますます私の中で「彼にとつてトーマスとは何だろう」と考えることが多くなつていった。

朝、二階へ行くも、一通り繋げると下に降り、一階から小さなブロックを持つてくる。

(中略) その小さなブロックを持つてクラス

に行き、人形の乗つた車を作る。

(十月四日)

そんな中、このように遊ぶ日があり、私は、興味を持ちつつ、トーマス遊びがまた、変化してくるのだからと、漠然と思つた。

テントを作つて嬉しそうに入る

十月六日、U夫はお昼の時間に、私を二階につれて行き、ブロックを少しずつ積み重ねては「ほら」「ほら」といい、何やら作り始めた。長いものや短いものを組み合わせて作つていたものは、随分とガッシリとしたものになり、U夫は「ほら、テント」といいながら、自分が中に入り、すごく嬉しそうに笑つていた。その瞬間、私は「こんなにもU夫の中で構築していたものがあるのか」と直観的では



あるが、感じ、感動した。その中に入ったU夫は、奥の方に入っては、私が「あれ、U夫、どこにいったかな」というと下の隙間から足を出してみたり、横の穴から手を伸ばしてみたりという遊びを何度も何度も繰り返した。

私にはそのテントが、確実にU夫の中に築きあげてきたU夫自身に思えたのである。そしてその思いが、トーマス遊びの中の機関車たちも、やはりU夫自身なのではないかという思いに繋がった。出来合いのおもちゃから、次に自ら、自分自身を作っていくかのように大型ブロックで赤や青、時には緑やいろいろな色の組み合わせの汽車を作り、何度も何度も作りその過程の先にこのテントがあるように思えた。U夫にとって「機関車で遊ぶ」から「機関車を作る」になったこと、その一つ一つが非常に大きな

意味があるのでは、と感じた。

### 最後に

U夫の遊びは彼にとってどうやら大切なものらしい、と思いつつも、毎日続く中で時には、表情は楽しそうだけれど、ずっとこの遊びをしていていいのか、と迷うことも正直言うことがあった。遊びの中の小さなことを一緒に共有してきてよかったと思ってる。

U夫が作ったものが、私にいろいろなことを気付かせてくれた。これからの残りの園生活も、園全体の暖かな空気の下、心豊かに共に過ごしていきたいと願うばかりである。

(福岡市清星幼稚園)